
行き来する転生者

珈琲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行き来する転生者

【Nコード】

N4464N

【作者名】

珈琲

【あらすじ】

10人の転生者がリリカルな世界を舞台に新たな人生を始める。

あるものは原作にかかわり、あるものは平穩を求める。

またあるものは原作キャラを助け、あるものはアンチに回る。

一体、どのような物語が生まれるのかはいまだ定まっていない。

初めまして、珈琲と申します。今回が初めての作品です。

基本、主人公「マチ」を中心にほかの転生者を関わらせたいと考えていますが、これからどうなるのかまだ考えていません（笑）。

転生者、神に会う

そこは部屋だった。

そこは壁も床も白一色。

本来、天井にあたる場所には何も存在せず、はるか遠くに星のようないくつもの光が見えている。

そして、そこには年齢、性別、人種、老若男女バラバラな10人の人間がいた。

その中の一人がこの物語の主人公となる青年、「マチ」だった。

sideマチ

（————ここはどこデスカ！？）

ふと気がつくと俺は白い部屋にいた。

そして俺の頭の中も真っ白になった。

自分の記憶が間違っていないなら……さっきまで東京駅の土産を買っていたハズである。

間違ってもこんな……心を病んだ方がいらっしやる部屋にはいなかったはずだ。

（落ち着けえ！　まずは落ち着くんだ俺！　まずは深呼吸して現状を把握するんだ。）

マチはパニック一步手前で周囲を窺う。

その際に、その動揺を口元をヒクヒクさせる以外、表に出さなかったのは評価できることだった。

（ぶつちやけ、パニックになりすぎて、なんか色々メーターが振り切ってたけなんですけどね）

（ここは部屋・・・だよな？

なんか俺以外にも人がいるみたいだし、えーつと6、7、8・・・俺入れて10人か。

ここどこだよ？ てかつ天井ヘンじゃね！？）

（落ち着けえ！ まずは落ち着くんだ俺！ まずは深呼吸して現状を把握するんだ。）

数行前と同じことを考えて、マチはとりあえず落ち着こうとする。

（えーつと現状をまとめると・・・）

- 1 ・自分は白い部屋にいる。
- 2 ・自分以外にも9人の人間がいる。
- 3 ・その9人は知らない人間である。
- 4 ・間違ってもこんな場所に自分で来た覚えはない。
- 5 ・夢ではない。

それら5つから導き出される結論は・・・「拉致られた」
（S A W 的な意味で）

「俺、拉致られたーーーーー!？」
『落ち着けや、この童貞。』

「ど、ど、どどど童貞ちゃうわ!!」

『ほう!?! いきなりの突っ込みにその反応・・・お前やるな! ?そして童貞だな?』

「なんだよ!! このどいつだ、その上から目線のセリフは! ?
あと童貞じゃねえ!!!」

どこからともなく聞こえる声。

その声から察するに俺の叫びに反応して、さらに応えてくれているようだ。

その声はほかの人間にも聞こえているらしく、皆反応している。

あるものは怯えて周囲を見回し、あるものは静かに次の反応を待ち、またあるものはマチに同情の視線を向けている。

(ちくしょう、そんな目で見るなよ!! 本当なんだよ!! orz)

「畜生! 誤解されたじゃねえかよ、どこのどいつだ!!」

『H A H A H A!! すまない、俺は神と呼ばれる存在だよ。君たちは死んだんだ。ドンマイ!!』

「ワン モア プリーズ?」

『君たち10人は死にました。これからアニメの世界に転生してもらいます。』

そこで初めてその場の10人が一斉の声を上げた。

転生者、旅立つ

やあ、俺の名前は「真館 太一 マダチ タイチ」っていうんだが、友人にはマチって呼ばれている。

俺は今年で22歳の大学4年生だ。オタク

容姿は中肉中背、黒髪、眼鏡の平凡な成人男性。

勉強もそこそこ、運動も特に秀でていない、特技も特にないが全体的に出来ないことのない

まさに THE 平凡 である。

先日上京した際に、就活帰りに家族や友人に土産を買っていたんだが……

気づくと拉致られてました（笑）

しかも神（自称）には死んだのでアニメの世界に転生させるそうですまる

ってことで前回に繋がります。

「どーゆうことが説明してくれないか、神（自称）？」

『H A H A H A!! なんとなく察してるくせに、聞くのか？』

詳しく説明すると、俺のミスで、本来死ぬ予定のない君たち10人が死にました。

んで全員オタクなので制限つきだけど一つ特典つけて転生させてやる。ちなみに行き先はリリカルなのはの世界だ。OK?』

「了解した。一回殴らせる。」

『だが断る！ それに他の奴らは喜んでいるみたいだぞ？』

「え」

見ると他の9人は神（自称）の言葉にそれぞれ戸惑いながらもしかし、皆、笑顔という共通点があった。
どのような反応かと言うと大体こんな感じである。

「やったー！！転生キター！最強オリ主だZE！！」（20代男性）

「つまんねー現実世界からオサラバだ！さよならローン！！」（40代男性）

「管理局つぶして・・・俺は新世界の神になる」（10代男子）

「クロノ君ハアハア」（30代女性）

「フェイトたんハアハア」（30代男性）

「ユーノたんハアハア」（20代男性）

駄目だ・・・こいつら何とかしないと・・・。

「・・・説明を続けてくれ。」

『順応性が高くて俺はうれしいよ、では説明を続ける。』

その言葉が終ると同時に、俺の目の前にひとつの光の球が浮かび

上がってきた。

他の9人の前にも同じ球があり、計10個の球がそれぞれの人間の前に現れた。

『目の前に現れた球は、転生後にそれぞれお前のら特性に合わせてデバイスに変化する。』

また君たちにはレアスキルなどの特典をひとつ付与する。では転生の準備があるので

詳しくは各自球に聞いてみる。』

その声とともに部屋は一転、暗闇に閉ざされ、俺と目の前の球だけになる。

「ウオ！！ びっくりした！！ 結局何も説明してなくね！？」

『まあ神はそんな感じなので私が説明を続けます。私に何か望む特典を仰って下さい。』

可能な範囲で叶えましょう。』

「マジで？てかその前に聞きたいんだけど、球さん（？）俺の死因は何なの？」

『はい、本来、あなたは80歳今で生きて大往生する予定だったのですが、何かしらの原因で運命が変わってしまいました。あなたは元の世界では心臓発作で死亡しました。』

「テンプレだね。んで特典ってのは？ 後、いつの時代で行くんだ？」

『お好きな能力をひとつ仰って下さい。世界のバランスを壊すよう

なものでなければ付与します。

また転生する時代は高町なのはと同時期に地球に生まれます。」

「なるほど。特典つてのはどんなのまで貰えるの？」

『はい。大抵のものは大丈夫ですが、あまりに世界観のバランスを乱すものは無理です。例えば、某金ぴかの宝物庫などは無理です。また特殊能力の場合、あくまで素養であり、転生後の経験や鍛練で変化します。それ以外の素養は転生先次第、つまり運次第です。』

「OK。つまり最初からチートではなく、あくまでチートの卵つてわけね。」

『はい。では特典はどのようなものにしましょうか？』

「・・・じゃあさ、こんなのは出来る？・・・つてのなんだけど。」

『・・・はい。大丈夫ですが、本当に宜しいのですか？』

「ああ。」

『では、転生を始めます。』

その瞬間、門が現われる。

門は大理石のような材質で暗闇の中でうつすら輝いており、物語に出てくるような雰囲気で神々しい。

ただし、現われたのはマチの足元にだが。

バガン！！

瞬間、門が開く。つまり・・・

「やっぱり、こういうオチかあああああああ！！！！！！」

『様式美です。』

門の向こうに落下していくマチは最後に聞いた言葉であつた。

転生者、旅立つ（後書き）

文章って難しいね。

他の作家さんを尊敬！！

転生者、出会う(前書き)

今回は会話ばっか

転生者、出会う

「?・・・うん?」

目が覚めると、そこは緑の木々が生い茂る森であった。
どうやらマチはその森の中に大の字で寝転がっていたようだ。

「転生・・・したのか?」

『はい。無事転生したようです。此处は管理外世界の一つです。』

「え? てつきり無印の舞台だった地球か、管理局に管理された世界かと思っただけですけど!」

「マズいなあ、魔法とか分からないじゃん。」

『いえ、魔法やデバイスは存在しています。ただ、過去に何かしらの原因で管理局の艦がこの世界に漂着、そこから技術を解析、利用しているようでミッド式と元々存在した魔法様式が混じっているようです。ちなみに艦は完全に機能停止、遺跡扱いのようです。』

「ほほう!? なんか面白そうだなオイ! 原作に関われないのは残念だけどチートに向けて鍛練は出来そうだな。」

そう言っただけでマチは自分にこたえる声の方を見るとそこには球(?)と思われる物体が存在した。

「・・・・・・・・」

『はい。魔法を利用した軍隊も存在するので、そういった戦闘方

法なども学べると思われます

が……どうしましたか？ マスター？」

「……ダレ？」

マチが見た場所には、鉄色をした座薬、いや弾丸、いや「杭」が存在した。どうやら自分が会話していたのはこの「杭」のようだが・

「あなたの特性や能力などを分析した結果、「杭」の形状になりました。私およびマスターの設定を説明しても宜しいでしょうか？」

「あ、ああ頼む。（剣とか銃とかないのか……微妙だな）」

「はい何か今不愉快な予感でしたがスルーします。

……コホン。まずマスターについて説明します。こちらをご覧ください。」

同時にマチの目の前の空間にモニターが開く。どうやらマチのステータスが表示されているようだ。

モニター内には小学低学年ほどの少年が映し出されていた。中肉中背、肩にかかるほどの黒髪、灰色の目をしている。顔立ちは整っているが目に前髪がかかっており、陰気な印象を他人に与えそうだ。

『マスターの立場は この世界における軍隊の訓練生といったものです。孤児で両親は死亡、現在は訓練生用の寮住まいのようです。名前はマーチス・ブレン、年齢は6歳です。』

「転生したのにオタクっぽいなあ。とりあえず住むところを心配

しなくていいのは良かった。・・・でだ特殊能力とかはあるのか？後頼んでいた特典は？」

『生来の能力としてレアスキル「圧縮」を保持、マスターが希望された特典も備わっています。』

「マジで！？ 冗談だったのにマジでレアスキル持ちなの！？ で、で圧縮って能力は何さ？」

『この世界のライブラリによると個人差もありますが術者の掌に触れた魔力などのエネルギーを圧縮、保持、解放といった一連の働きの総称のようです。実際にマスターが試してみた方が宜しいですよ』

『っ』

「ほほう！？ まったくワカランが応用できそうな能力だな。後で試そう。」

『次に私についてですが、マスターのデバイスで待機状態は5cm程の「杭」。分類ではインテリジェンスデバイスで、孤児であるマスターが両親の形見として特別に所持しているといった扱いのようです。』

「了解。じゃあ細かいことは後々試すとして、これからどうしようか。訓練所ってとこに行けばいいのか？」

『ああ、それなら・・・』

「こら！！ ブレン訓練生！！ 入所式ををボイコットするとは良い度胸だなあ！？ 歯あ食いしば」

れ!!」

マチ達が喋っていると、そこに長く青い髪をポニーテールにまとめた女性が怒鳴り声をあげながらやってきた。年齢は20代後半、なんでしょうか・・・胸には素晴らしいミサイルが二つ搭載されている。しかもその兵器がブルンブルンと揺れていたらもう・・・。

「へ!?! すいませブフォ!!?!?」

マチは女性の拳を顔面に食らい悶絶する。ちなみに視線は胸から外していない。

「さつさと立て! 入所式はもう始まっているんだぞ! 指導官である私に恥をかかせるつもりか?

そうなんだな!?!」

そう言うって条件反射のように規律する。

「はい、なんだかよく分かりませんがすみません!! えゝつと・・・」

「ん。私はお前の指導官テレサ・アックスだ。敬礼などは今はいい。さつさと式場へ向かえ!」

「分かりました!! テレサ先生!!」

それが3年の後に「掌握」と呼ばれるマチとそれを生み出した指導教官テレサの出会いであった。

「テレサ先生、オッパイ最高です!!」

（『マスター大物すぎます・・・!!』）

「・・・よし、後で私のドキドキ個人レッスンだ。・・・」
「・・・シナス・・・。」

出会いだった。

転生者、出会う(後書き)

会話が多い。

戦闘描写ってどうやるの？

転生者、鍛える（前書き）

久しぶりに投稿！

転生者、鍛える

ドゴォー！！

今の今まで自分が立っていた地面に魔力弾が着弾、あまりの威力に地面が隆起する。

「ぎゃあああ！！ 死ぬ！死ぬ！ マジ死ぬ！！ 絶対イジメだろコレ！！」

「無駄口をたたくな！！ それ！ もう一回行くぞ。」

「オウフツ！？」

やあ！みんな元気かい！？

皆の主人公マーチス・ブレンことマチは元気だよ。いま何やってるかっていうと訓練です。（笑）

え？処刑じゃないかって！？

まさかあ。転生系主人公にお決まりの”地獄”の訓練に決まってるじゃないか。

んで現状はと言うと・・・

「クツ！？ 魔力弾が弾幕ってより既に壁じゃないか！？」

『マスター 回避は無理です。 防御を固めてください。』

「え！？ ちょ、無理！ 間に合わないあああああ！？」

と。こんな感じだ。

現在は入所式からおよそ半年経過してる。

半年の間 座学、訓練ともに様々なことを経験した。

日本では一般人である俺。

この世界で当初こそ対術はもちろん「魔法」何ソレおいしいの？という状況だった。

しかし、この半年間の訓練づけの日々、そして指導官テレサ・アックスによる特別訓練と称した

弾幕イジメにより同期の他の訓練生の中でも上位の実力を誇っている。

特に機動力に関しては現役の隊員を含めても五指に入るだろう。

あ・・・なんか意識が飛びそう。

さて、なんかお花畑が見えてきて気分もいいのでこの世界のこと、俺の現状をみんなに説明しようと思う。

今俺がいるのは「マリアネス」という国だ。この世界では最大の勢力を誇っており、特に魔法戦闘の面では最も発達しているらしい。他にもいくつもの小国があるがマリアネスが先の大戦において一人勝ちして、他の国を半植民地化しているような状態となっている。ただ武力による支配で、従わせているためよく反乱やテロが起こる。そんな物騒な状況なもんだから、俺のような幼い孤児の多くが訓練生として軍に引き取られているといった環境だ。

強くないと即死亡フラグな世界じゃねえ？てか原作と関われないじゃないか！？てか今この瞬間死にそうだし！！ああああああああ！！ちくしょう！！

・・・ふう。失礼、取り乱した。

とまあ、こんな危険だが強くなることに關しては最高の環境で日々鍛錬している。

次に俺のステータスだが典型的なヒット&アウェイな戦闘スタイルだ。

簡単に説明すると・・・魔法がほとんど使えません（笑）

何故かというと、俺が転生した物件（BODY）は魔力SSランク以上、後で詳しく紹介するけど、体術の才能も腐るほど有るらしくもう何年かしたら魔力を用いないなら、軍隊でも五指になれるとテレサ教官にもお墨付きを頂いた。

ただ・・・俺には所謂「魔力を体外で魔法に変換する才能」がないらしい。

そりゃもう清々しいほどに、逆に才能って言うてもいいくらいに（笑）

普通さ！転生オリ主ってチートもしくは優秀だったりするのがテンプレじゃないか！？

「掌握」っていうレアスキルを一応持つてるけどさ。キツクね！？

「さあ！ぼーっとするな！！ 貴様魔法をまともに出来ないのだからせめてそれ以外くらいは一流になれ！！ そして私の評価に貢献しろ！！」

「教官、特別訓練は感謝しますが、もう無理です。 死にます。」

「気にせいだ。もしくは夢だ。」

そして訓練（地獄）は俺が気絶するまで続いた。 o r z

「掌握」

空気中の魔力、または魔法を掌から吸収・活用することが出来る。ただし、魔法という形態になっている場合、「無色」の魔力が一度「魔法」という形で変質しているため体内に吸収した際、自分の魔力と反発して激しい負担となる。一応、吸収による魔法防御や魔力回復できるが、負担などを考えると弱い魔法にしか通用しない微妙な能力。

空気中の魔力なら結構吸収できます。

転生者、鍛える（後書き）

他の転生者の能力募集！！

転生者、鍛える2（前書き）

前回書き忘れました。

レアスキルを「圧縮」から「掌握」に名称変更しました。

転生者、鍛える2

さてと前は良く分からなかっただろうから現状を詳しく説明しよう。

現在、俺は訓練所に入って3年目だ。同期とはあまり中良いやつはいない。

それは何故か！？

簡単にいえば俺が俗にいう「落ちこぼれ」という訓練生だからだ。

この訓練所では大きく「体術」「魔法」「武器」の3つの戦闘方法、そしてそれ以外の情報収集や簡単な治療、装備などの整備、様々な技術の習得を行っている。そして将来は一流の戦士を作り上げることがを目的としている。

ただ、そこで俺は「魔法」が一切使えない。

一応、デバイスの補助で飛行やバインド、魔力弾、念話など初級のものでは使えるがそれ以上の魔法となるとデバイスだけで出来ないのデキナリ使えなくなる。

「魔法」は戦闘技術として、もちろん有効な技術である

そのため、それを使えない俺は必然的に「落ちこぼれ」ということになる。

「落ちこぼれ」だからこそ教官や同期にはオミソ扱い。イジメまでには行かないが俺のヒエラルキーは最下位に近い。

そりゃ最初はショックだった。

普通転生者なんだからチートもしくは優秀だろう！と思っていた。

だが、実際は「落ちこぼれ」だ。

おそらくテレサ教官に実験訓練（効果的な訓練の模索および専門特化型の訓練、マイナー技術の導入）の被験者に選ばなければ今の俺はいないだろう。

「魔法」に関しては魔力量はあるので使える初歩のもののコントロールだけ。

他は体術、武装とわず戦闘技術のみを鍛えている。

ただし通常のモノだけでなく、特殊な装備や特殊な体術を取り入れた戦闘方法を訓練している。

習得しているのは基本的な軍の戦闘技術、太極拳などの中国拳法やこれ忍術じゃねえ！？ていうような古武術である。

まあまだ鍛練中だけだね。

ちなみにテレサ教官は階級は軍曹、見た目は金髪の神宮寺まりもみたいな外見だ。

素晴らしい巨乳です。ロケットオッパイです。

「おい、マーチス訓練生。何一人でブツブツ言っている。」

「あ、教官！ オッパ、おはようございます。」

「おい、今なんか訳わからないこと言っただろう！？ セクハラすれすれってかモロなこと！？」

「H A H A H A 気のせいですよ！」

「ん。そっか」

とこんな風に訓練時以外は割と気の良い巨乳なおねいさんって感じだ。訓練時は鬼だけだね。

「さて今日はお前のデバイスの訓練だ。お前のは形状が特殊だからな。」

「なんてたって杭ですもんね？」

「ん。まあこの実験訓練の趣旨としては丁度いいんだが、トンファーとか鉄パイプとかならまだしも杭だもんな。厄介だよ。さてマーチス訓練生、正直 杭でどう戦えばいいのかまったく思いつかないのだから思いつく限りの杭の特性を挙げてみる。」

「ハイ。頑丈さ、それに裏打ちされた貫通力……あとは整備が不要ですか？」

「ああ、そんなもんだな。今日から杭を武装に組み込んだ戦闘術を編み出すわけだが、なにか考えていますか？」

「一応、考えているんですが見てもらえますか？」

「いや、むしろお前は魔法以外なら既にトップラスなんだ。実戦形式で行くぞ。」

となぜか教官はうれしそうに言う。

「え」 まだ試してないんで遠慮したいんですが……

「安心しろ。3年前ならいざ知らず、今のお前なら死にはしない。」

「怪我は・・・・・・・・？」

「それでは訓練を始める！！」

「いや！？答えてよ！！？」

「教官に口答えするな！！くそ虫が！！罰として私は魔法も使う！！」

「・・・・了解しました。地獄に堕ちろ！！」

ちくしょう。

生き残る、生き残ってやるぞ！！

俺、帰ったら結婚するんだ

「バーンボトル！！」

ブワアアアアン！！

テレサ教官のはなった魔法が俺の視界を真っ赤に染めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4464n/>

行き来する転生者

2010年10月25日22時44分発行